木曾義龍

菊池重三郎

木曽妻籠

菊池重三郎

東京新聞出版局

＜著者紹介＞

菊池重三郎（きくち・しげさぶろう）

明治34年、宮崎県生れ。立教大学英文科卒。著書「鸚鵡の宿」「ヤコブの梯子」「英吉利乙女」「馬籠」「木曽馬籠」「木曽路の旅」「故郷の琴」「空から来たカルテロ」など。訳書「チップス先生さようなら」「アラバマ物語」など。現住所・神奈川県大磯町山王町374。

内堀　勉（うちぼり・つとむ）

明治44年、長野県木曽妻籠生れ。帝国美術西洋画科（現武蔵美大）卒。国画会賞二回受賞。現在、国画会会務委員、信濃美術協会会員。現住所・東京都杉並区久我山3—14—13。

木曾妻籠　　**定価850円**

昭和47年8月15日発行
著　者・菊池重三郎
発行者・伊　藤　沆
発行所・中日新聞東京本社
東京新聞出版局
東京都港区港南2—3—13
印刷所・長苗印刷株式会社
製本所・大口製本印刷株式会社

©1972　　落丁乱丁の際はお取りかえします

序

菊池重三郎さんは、私が大磯在住の頃から――といふよりも、そこに住む機縁をつくってくれた、古い友人である。大磯人としても、古い人で、そこで没した島崎藤村に、心のこもった世話をしたらしい。

自来、私が東京へ居を移してからも、菊池さんとの交際は、絶えないが、誰が見たって、こんなマジメな人物はない。たしか、九州の人と聞いたが、それらしい重厚さ剛毅さと、そして少しヤボなところも、兼備してる。その癖、見かけによらないハイカラさが、時たま顔を出すのが、私には、少からず面白いのだが、これは、恐らく、同君が若い時に、イギリスに留学したためだらう。

そして菊池さんは、翻訳をしたり、〃新潮〃あたりに、文章を発表したり、文人としての経歴は長いのであるが、一向に、文士くさくない。といって、翻訳作品の選択も自分の作品も、独特の見識と趣味で貫かれてる。ただ、文壇の流行に見向きもせず、文壇

の党派に超然としてるので、一見、文士らしくないのだらう。

菊池さんの文章に、多分に清教徒風なものがあるのも、文壇で珍らしいが、それよりも、この人が自分の文章を、ひどく大切に扱ひ、切磋琢磨の限りを尽す点を、私は最も敬服してる。これは、流行文士に真似のできないことで、菊池さんの誇りとすべきだらう。

そして、彼は文章に執着する如く、馬籠・妻籠といふ山間の村に、渾身の愛を傾けてるらしいが、それは、この書物を読むことで、おのずから判明するだらう。

昭和四十一年夏

赤坂双六居にて

獅子文六

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

木曽妻籠

目次

序……獅子文六……一
まえがき……七
妻籠
その一……一五
その二……二四
その三……三二
その四……四五
その五……四八
おぼろ月夜
いずこへ……六九
おゆふさま……八四

妻籠本陣跡……九三
人さがし……一〇三
あららぎ……一一九
鞄の中味……一四〇
田舎ばなし……一六一
おぼろ月夜……一六九
あとがき……一八四

挿画目次

吾妻橋のあたり……一七
奥谷の囲炉裏ばた……三五
鯉野のあたり……五三
馬籠本陣跡……八七
馬籠方面から妻籠部落に入る……一〇五
地蔵峠から見た御岳……一七一
木曽郡図、妻籠周辺図……見返し

挿画・カット　内堀　勉

箱写真　沢頭修自

まえがき

一九七一年十二月七日の晩、八時が過ぎたばかりでした。佐川レイ子は電話のそばで、ぼんやりしていました。電話のそばでと、わざわざ断わったのは、いつもとちがってこのときは、少しばかり気にかかることがあったので、そうなったのだろうと、——これは後から考えて——思うのです。

実は今日・明日にでも、もし小父さんが電話を下されば、それはわたし宛にかかってくる筈なのです。小父さんというのは、自家と親しい家の、わたしたちの父よりもっと齢うえの小父さんなのです。初めはセンセイと呼んでいたのですが、それだけは勘弁してくれと仰有るので、小父さんになったのです。

小父さんは、宮崎へ行くと言って旅に出ました。そしてかれこれ半月も経ったでしょうか。

出発するときの話では、帰り途には木曽に寄るつもりだから、そしたら電話をかけてあげる、宜かったら出掛けておいで、と仰有って下さったのです。ところでその話はま

だだいぶ先のことでしたし、わたしはそのころは冬休みになってはいても、卒論のすすみ工合いいかんでは、或いは旅行どころではないかも知れないのです。ですから小父さんの誘いは、内心とても嬉しかったのですが、曖昧な返事しかできませんでした。

それに小父さんには旅の都合が色々あることでしょうから、果たして出発のときの話がそのとおり運ぶかどうか。多分、長旅の疲れから直接自家に帰られるのではなかろうかと、そんな気がしないでもありませんでしたが、でもそう考える一方で、小父さんがいい加減なことを言う人でないことは、平生から解っていますので、「来月の七日か八日あたりに……」と仰有った電話が、やっぱりかかってくるような気がしてなりません。それも八時が過ぎてからのことにちがいない、と思い思いしていたのです。八時過ぎと決めていたのは、長距離だと電話料が安くなるからです。

一方、小父さんと呼ばれる私はといいますと、同じ十二月七日の朝は、室戸岬の沖を神戸へ向かっている船の中で目がさめました。そして紀伊水道にはいって和歌山や徳島が、近く視界に入り始めるころには、今日の行程の、行く先々のことで、頭がいっぱいでした。もちろん予定どおり、——佐川レイ子にも話したように、——木曽泊りのつもりでしたので、神戸に上陸ったあとは、不案内な土地の駅や電車を乗りついで、その方

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

向へ動いたのです。

名古屋で乗り換えて、中央線の列車に腰をおろしたときには、さすがにホッとして溜息がでました。ここからは何十回となく通り慣れた路線ということもあり、それに朝からの緊張が一度に弛んで、たて続けに欠伸がでました。

中津川まで来ますと、もう木曽に着いたも同じようなもので、あと二駅で木曽谷に入ります。

坂下駅を出てすぐ、比較的長いトンネルを潜り抜けます。

列車は木曽川の左岸の一段高いところを奥へ走って行きます。

川を距てた向こうの山は（昔、賤母の御料林といって）、うっそうと茂る檜の山で、夏なら仏法僧も啼く深い森林ですが、それが今日は全然おもむきを変えています。

真っ白に雪をかぶっているのです。岐阜県と長野県の県境を越えたトタンに、これです。私は目をみはって愕きました。

二十四時間前にはまだ宮崎の方にいました。そしてあまりの陽の眩しさと海の碧さから、泳ぎたい衝動におそわれたものですが、それがウソみたいです。

ここは、どう見ても早々と、もうすっかりクリスマス風景です。

寒さで黒ずむ檜の山を背景にして、淡く粉雪が舞っています。降りに降った雪が、い

ちおう歇んだところらしいのです。

空がいくぶん明るく、夕焼けの気配さえ感じられて、明日は晴れるだろう、と私は思いました。

佐川レイ子のことが、ふと頭を掠めました。そんな呼びかたをしては何だかよそよそしくて、やっぱり日頃呼び慣れた「レイちゃん」がいいのですが、卒業論文を「リイ代数の構造について」と「ブラウワー不動点定理の新しい証明」の「どちらにしようかなあ」などと決めかねていたことを思うと、いつまでも「チャン」づけで呼ぶのは大人気ない話です、少なくとも人前では。

私は、レイ子が家族の中で一人だけ木曽へ来たことのないのを知っています。ですから、同じ見せてやるなら自分といっしょがいいという自信が、木曽に関してはありました。とりわけ、こんな美しい雪景色は、ここでは滅多に見られませんので尚のことです。とにかく宿に着いたら電話で誘ってみよう、と思いました。

それにしてもいちばん日の短いときです。中津川で下車して馬籠へ登る手もあったのですが、いっそそのまま南木曽駅まで足を伸ばして、そこから妻籠の寺坂正太の宿で泊めてもらうことにしたようなことでした。

八時になるのを待って、私はお茶の水の家に電話のダイヤルを回しました。
呼び出しのベルが鳴るや否や、間髪ヲ入レズというような速さで「ハイ・佐川です」と、それもレイ子の声でしたから、彼女が私の電話をどんなに待ちくたびれていたか、その気持ちが解りすぎるくらいよく解って、思わず声のはずむのを覚えました。
そして本当は今すぐにでも……と言いたいのを押えて、明日の朝、七時台に東京を出る新幹線で名古屋に来れば、中津川止まりの列車が待っている。それに乗れば正午には中津川に着く。そこまで屹度迎えに出ているから、と打ち合わせをすまして、電話を切りました。
そして翌八日は約束どおり、私は中津川までわざわざレイ子を迎えに行ってやりました。というのも、木曽には初めての彼女に、まず県境から説明して聞かせたいと思ったからで、昨日と同じコースを二度往来するのも、沿線の美しい雪景色を思えば、それが少しも苦になりませんでした。

妻籠(つまごめ)

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com